提出された主な意見等

A　その地域の実情にあった中での、新たなグリーン・ツーリズムのすごし方、楽しみ方、地域交流や自然体験、ＩＴ情報網などの活用も取り込んで、不便を感じることなく地域の自然との楽しみ方を満喫して頂きたいものですね。//（反面、不便だからこそ何もない中で、自然のすばらしさを満喫できるのかな？？。。。//）

B　不便の魅力は、体験とともにプロセスの中で伝わってくる、感動であったり、わくわく感であったり、自然のすばらしさとの出会いであったり、地域の人とのふれあいとの出合い（出愛）であったりと、様々なこれから起こり来るドラマ、今の瞬間より先に起こり来る可能性に寄せる未知なる期待感（想像を超えた出会いへの期待感）が潜んでいることかもしれません。
　だからこそ、何気ない普段の地域が気づいてないところが、ツーリズムがもたらす魅力として浮かび上がってきているようにも思います。

C　ヨーロッパのグリーンツーリズムを参考にしながらも、独自のやり方を創り上げていこうっていう趣旨ですね。賛同します。

D　鳥取県の地域が普段の何気ない暮らしの中で何気ない魅力を探し、少しばかりの補助的演出（例-小別府ののぼりのような感じや、花等の自然的群落の創出等）を加えたりすれば、今よりさらに魅力が増してくる要素を探してみてはいかがでしょうか？・・・

E　ツーリズムは、地域の新たな雇用を作り出すきっかけづくりとして、大きな手段になりうると感じます。

F（Ｅに対する意見）
　ツーリズム「観光」という言葉によって、町村を越え、品目を越え、業種を越えてエリアの魅力を一本で発信できますね。

G　梨狩りを見ててもそうですが、通過型のものを目指すか、滞在型を目指すかのコンセプトがはっきりしないと、その周りの環境整備も中途半端になり、結果的に体験する人にとって中途半端なものになってしまうと思いますが・・。

H（Ｇに対する意見）
　滞在型のメリット①顧客と深く関わることでファンを増やせる②客単価が高い③顧客との関係が深いので周年、日程調整等がやりやすい。
　デメリットは①受け入れ体制を作るためにコストがかかる。②顧客に満足を与えるために独自性が必要③プロのガイドが必要
　通過型のメリットは①旬の農産物、景観などの地域資源を活用できること②施設間でお互いを利用することで多様なサービスをコストをかけずに提供できること③コースを設定することでその他の業種ともコラボレーションできること。

I　自分たちがわかっても、来られるお客さんが感じなければいけないと思うのですが、いかがですか。
　それと、観光にしてもそうですが、一番綺麗な景色や風景を写真とかに載せてますが、一体それはいつの時期にどのように見えるのか、感じることができるのか、よくわかりません。そんなことが丁寧に説明してある、又はできるシステムは必要になりますよね。

J（Ｉに対する意見）
　ＩＴ対応によって双方向の情報交換を進めています。

K　フランスの田舎の農家レストランでは、レストランの裏の畑に季節の野菜が植えてあり、それをお客さんが好きなものを選び料理を頼む面白い所があります。
　レストランの主人に「何でこんなことするのか」と尋ねましたら、「いろいろ注文されるけど自分が実際に見て食べたいものをもって来てもらう方が楽だし、お客さんも喜ぶ。」と言われていました。
　自分も食べましたが、実に美味しいものでした（自分が選んだのだから誰にも文句は言えないですよね・・）。
　このように畑や田んぼを活用したものを難しく考えなくても出来ますよね。何でも無いところに実は観光農業があるような気がするのですが・・・。

L（Ｋに対する意見）
　そのとおり。特に都市生活者に対しては非常にアピールできると思います。「食」をとおして人が生きていく上で必要な「根元的な価値」を最大限にアピールできます。

Ｍ　今、インターネットの普及はめざましく、また子どもでも簡単に活用しています。我が家でも小学校６年生の子どもがインターネットでゲームをやっています。インターネットを活用し、ネット上に“バーチャル農村とっとり（仮名）”をつくり、鳥取での農作業体験をＰＲしてはどうでしょうか。
　ネット上のバーチャル農村で、自然と共存する人間社会のシステムを構築してはどうでしょう。
　ゲーム感覚で参加でき、鳥取に愛着をもってもらい、環境問題解決にも役立つような“バーチャル農村とっとり”になるような気がしませんか。

Ｎ　行動計画の４　主体的連携組織づくりへの支援
　(2) 観光農業、体験観光等の各種研究会との連携
　の項目でいくつか提案させていただきます。

１　「あそび」は無くならない。園に来てもらうことは収穫労力の削減だけでなく、真の農業理解のための対話のチャンスになる。そういう価値を積極的に発信していくべきだ。そういう意味で情報化対応は一人でも発信を始められるのでやっていくべき。
　ただ、情報化対応は一つの方法である。固定客を増やすためのノウハウを研究すべき。対話によって得られた顧客はファンになってくれる。そういう「ねこ型」の客を増やすべき。新たな設備投資をしないでもやっていける。

２　農業者のＩＴ活用を一定期間毎に安価でメンテ、アドバイスしてもらえる機関から人材の派遣をしてもらいたい。（出張講習や、各種のメンテナンス）ＳＯＨＯ集団が対応してもらえないか？

３　ネット販売に対応したいが送料が高く踏み切れない。施策的な支援がして欲しい。

４　宿泊施設との連携が起こってきており、事前に情報をもらえば優先的に入園してもらうことも可能。そういう情報のネットワークを作って欲しい。

５　都市生活者が田舎の暮らしを体験したいのなら受け入れる農家に情報を流していくべき。そういうネットワークを作って欲しい。

Ｏ　どの地域（例えば、正真正銘の農山漁村、都市的、都市に近い田舎、県内でも都市部などどんな地域においても－という意味）においても通用する日本版グリーンツーリズムを導入すべきと考えます。
＜日本版グリーンツーリズムとは－私の考え＞
　欧州で盛んな、いわゆるグリーンツーリズムとの区別
　１　長期滞在型でない、可能な条件で（日帰り週末型含む）
　２　例えば大規模な農場など、特別なグリーンツーリズムのフィールドを持たない
　　あくまで日常の生活にフィールドを求め、その中の地域の特性を生かす。
　３　受入先への負担がかかりすぎ（担い手：例えば女性）。地域全体で受ける。
＜導入に当たっての手順＞
　その地域に暮らしを営む人々の地域資源の再発見と、それに誇りと愛する心を再発見するため、地域ぐるみの意志の取りまとめ、話し合い、勉強会。
　まずは、グリーンツーリズム等の導入できる土壌づくり、根をしっかり、風雨に負けない太い幹づくりを（地域の中で・・・）
　そのためには、住民による地域案内人（エスコーター）から始めてはどうか？
　エスコーターは有料－これも続けるポイント
　グリーンツーリズム導入により、地域の元気づくり、ひいては生き甲斐、やり甲斐づくりにもつながるが、継続していくには、受益者（参加者）も応分な負担をして、地域に利益が還元される仕組みがなければならないと考えている。
　問題は、住民によるものである時、お金を頂く→責任が伴うことであり、この辺りの認識を改めていく事も、導入、継続に限らず、地域行政や農家等の陥りやすい点であり、経済的活動がなければ地域の自立、再生は難しい。
＜次のステップとして・・・＞
　民泊する、様々なプログラム（田植え、漁、枝打ち、そば打ち、縄あみ、つるあみ、染め物、郷土料理づくり、市民農園的な取り組み等）を導入する。
　ひとまず、いきなり民泊、農家レストラン、農山漁村体験を受ける前に、既存施設（レストラン、宿泊施設、学校、ＪＡに限らず、廃校、廃屋や跡地、休耕田、ｅｔｃ）、ノウハウ交換、連携、フル活用が導入しやすい条件と考える。
　いきなり、都市部（県外）からのエントリー者を募る前に、まず、地元民の、地元民のための実施をすべき。
　これらのネットワーク、連携により社会の均一化、合理化、一元化、効率化、市町村合併、各種の組織改変などの社会環境の中で、唯一（？）多様化するニーズ、パーソナル化等に対応しやすい（導入しやすい）方策ではないかと考える。